


就職と自己 - 「自己分析」という迷宮 -


上瀬由美子
(江戸川大学)

1. 就職活動における自己分析の背景 と矛盾

- ▶ 現代社会にある「自己実現せよ」「ユニークであれ」という価値観
 - Baumeister(1987) 20世紀後半の自己: 個人のユニークネスに対する信念・自己啓発の価値、パーソナリティによる自己定義、選ばれた人間になるという目標。

- 
- ▶ 自己分析するほどユニークな自己が強調されて、対象から離れていく。
 - ▶ 自己カテゴリ化による外集団差異の強調。
 - 「あの個性のない集団の一員にはなれない」「もっと自分が活かせる職場があるはず」

2. 顔のない社会人 (社会人ステレオタイプ)

- 
- ▶ 学生からみた社会人は「外集団」であり、ステレオタイプ化されやすい。
 - 「普段話す機会がない」と言う学生(バイト先のフリーターの方が距離は近い)
 - ▶ 上瀬・下村・高橋(2005)社会人ステレオタイプ
 - 外見、疲労イメージ、疲労イメージ。外見は軽蔑・同情、疲労は有能・同情、キャリアは有能・親しさ・賞賛。
 - 就職効力感に、キャリアイメージは+、疲労イメージは-。

3. 自己分析の方向に関する疑問

- ▶ 就職活動は、社会人のサブグループの一つに自分を位置づけていくこと。
- ▶ 人格的同一性関連カテゴリと集合的同一性関連カテゴリ、自己定位のための心理テスト（永田，2000）。
 - 就職における自己分析は、集合的同一性関連カテゴリを獲得するために人格的同一性確立を追及するという遠回りをしているのでは。

4. まとめ

- ▶ 自己分析に価値をおくことは社会全体の傾向だが、むしろ自分が所属することになる社会人カテゴリの成員像を具体的、肯定的に示す情報収集が必要では？
- ▶ 適切な自己把握という問題に向けて、両話題提供者への質問
 - 適切なサイズ、問題とする側面について（下村）
 - 自己確証的な情報処理の克服について（山田）